

以下開き不良

初等科國語

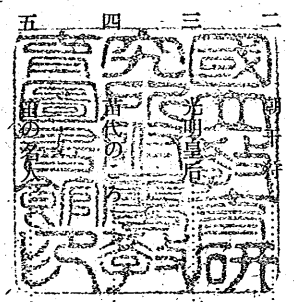
三

第四學年前期用

文部省

もくろく

一 朝の海へ.....二



六 機 械.....七

八 夏.....十

九 油 蟬 の 一 生.....十一

十 と び こ み 臺.....十二

朝の潮風あびながら、  
海へをかける。

しめつた砂をけりながら、  
波うちぎはを、とんとんかける。

明かるい海だ、どこまでも。

地平線は銀色で、

空と海とがとけあつて、

明かるい海だ、どこまでも。

ぼくらは石を投げてみた、

「二二三」で投げてみた。

弟の石が海に落ち、

つづいてはくのが海に落ち、

かもめが五六羽とんで来て、

水にもぐつてひよいと出て、  
ひよいと浮かんでまたもぐる。

風に向かつてぼくたちは、  
両手をあけて息を吸ふ。

朝の海へはもう春で、  
みんな楽しい、新しい。

## 二 潮 干 狩

海岸は、一面に潮が引いてゐて、もう大勢の人たちが、  
潮干狩をしてゐました。

先生は、私たち四年生の人員をお調べになつてから、  
次のやうにおつしやいました。

「これから潮干狩をするのですが、いつものやうに、  
四人づつ一組になつて、仲よく貝をお取りなさい。さ  
うして、海には、どんな生きものがゐるかを、よく氣

をつけて見るやうになさい。」

勇さんと、正男さんと、花子さんと、私と、四人が一組になつて、ほり始めました。小さな熊手で砂をかくと、かりとさほるものがあります。三センチぐらいのあさりでした。あさは、こんな浅いところに、もぐつてゐるのかなと思ひながら、むちゆうになつてはつて行きました。おもしろいほど、たくさん出て來ました。

ほつたあとに水がしみ出て、まはりの砂が、少しづつくづれて行くので、手ですくつて、かい出しました。すると、小石のやうなものが、手にさはりました。砂を拂つてよく見ると、大きなはまぐりでした。はまぐりは、あさりよりも、少し深いところにゐることがわかりました。

「おや、こんな貝が出た。」

と、正男さんが、六七センチもある細長い貝を、みんなの前へ出しました。みんなは、

とうれしそうに笑ひながら、勇さんが走つて來ました。

手には、葉の根もとにまゐる玉のやうな袋のついてゐる、茶色な海藻を持つてゐました。

「おい、きみたち、このまゐる玉を、みんなで持ちたまへ。いいかい。さあ、指で勢よくつぶすのだよ。」

と、勇さんがいつたので、私たちは、みんな指先に力を入れました。「パチン。」と音がして、まゐる玉がはじけました。

「おもしろいなあ。もう一ぺんやらう。」

と、みんなで、「パチン、パチン。」とつぶしました。

先生がごらんになつて、

「おもしろいことをしてゐますね。その海藻は、何だか知つてゐますか。」

とおたづねになりましたが、だれも知りません。

「ほんだはらといふものです。こんぶといつしよに、お正月のおかざりにするでせう。」

といつて、いろいろ、貝の名前を思ひ出してみましたが、だれにもわかりません。

「先生に聞きに行きませう。」

と、花子さんは、その貝を持つて、先生のところへ走つて行きました。先生は、

「これは、いいものを見つけてましたね。まてがひといふ貝ですよ。持つて歸つて、みんなで標本を作つてごらんなさい。」

とおつしやいました。

私たちは、波うちぎはを、ばちやばちや歩きながら、子牛がねてゐるやうな岩の方へ行きました。

ひやりと、足にさはるものがありました。拾つて見ると、ぬらぬらした、茶色な海藻でした。はばの廣いひものやうな形をしてゐます。

「おや、春枝さんは、わかめを拾ひましたね。」

と、花子さんがいひました。私は、これがあの、おわん

私たちは、先生といつしよに、岩のそばへ行きました。

岩の間のすきとほつた水の中で、きれいな、六七センチばかりの魚が、からだをくねらせて、岩に生えた海藻の間を上手に泳いでゐました。べらといふ魚ださうです。

何とかしてべらを取りたいと思ひました。先生にお願いしますと、先生は、たもで勢よく、さつとおすくひになりました。べらが、たもの中でびちびちとはねましました。

海岸で、晝のおべんたうをたべました。

そのころから、潮がだんだんさして來て、私たちの歸る時には、あのあさをほつたところも、海藻を拾つた波うちぎはも、もうすつかり、海の水でかくされてゐました。

### 三 光明皇后

聖武天皇の皇后を、光明皇后と申しあげます。

そのころ、都は奈良にありました。野も、山も、木立も、みどりにかがやく奈良の都には、赤くぬつた宮殿や、お寺のお堂が、あちらこちらに見えてゐました。その中に、光明皇后のお建てになつた、せやく院といふ病院が立つてゐました。

せやく院には、大勢の病人がおしかけて、病氣をみてもらつたり、薬をいただいたりしてゐました。

「この子は、ひどい目の病で、ものが見えなくなりはないかと心配しましたが、毎日、かうして薬をいただいてゐるおかげで、たいそうよくなりました。」と、うれしそうにいふ母親もありました。

「私は、おなかの病氣で、長い間寝てゐましたが、このごろは、おかげでだいぶよくなりました。これも、みんな皇后様のお恵みでございます。」と涙をこぼして、ありがたがるおばあさんもありました。

光明皇后は、この薬の風呂へもおいでになつて、一人一人をしんせつおせわなさいました。

#### 四 苗代のころ

春の少し暖い晩、「くく、くく。」と、蛙の鳴く聲がします。

そのころから、晝間は、廣いたんぼの一部で、もう苗代の仕事が始ります。黒い牛が、ゆつくりと引いて行くからすきのあとには、ほり返された新しい土が、暖い日光に照らされます。

土がほり返され、くれ打ちがすむと、田に水がなみなみと張られます。今度は、牛がまぐはを引いて、泥水の中を、行つたり來たりします。かうして、田の土は、だんだんこまかく耕されて行きます。

夜、遠くの田で鳴く蛙の聲が、「このころ、このころ。」と、にぎやかに聞え始めます。

人たちをお見まひになりました。やさしいおこばを、たまはることさへありました。

このやうに、しんせつにしてくださいので、どんな重い病氣でも、きつとなほるといふうはさが、いつのまにか日本中にひろがりました。

光明皇后は、手足の痛む病人や、傷の痛みがなほらないやうな者のために、薬の風呂を作つておやりになりました。この風呂には、いつもあたたかい薬の湯が、あふれてゐました。

「皇后様が、御自分で、病人のせわをなさるといふことだが、ほんたうだらうか。」

「こんなにしんせつにしてくださいければ、皇后様におせわをしていただくのと、同じことではないか。」

「まつたくその通りだ。うはさに聞けば、皇后様は、千人の病人のせわをなさるといふ大願を、お立てになつたさうだ。ほんたうに、もつたいないことだ。」

二センチか三センチぐらゐの、若々しいみどりの苗が出そろつて行くのは、見ただけでも氣持のよいものです。ちやうど、たんざく形のみどりの敷物を、きちんと間を置いて、敷き並べたやうです。

苗が、二十センチぐらゐにのびて、葉先が、朝風にかかるくゆるやうになると、廣いたんぼは、しだいににぎやかになります。そろそろ、汗ばむくらゐ暑い日ざしを受けて、男も、女も、牛も、泥田の中で働きます。この田も、あそこの田も、ほり返した土のかたまりの間には、もうひたひたと、水がたたへられてゐます。

蛙のすみかが、かうして、たんばいっぱいにひろがるのです。晝間は、働く人や、牛にえんりよをするやうに聲をひそめてゐますが、夕方から夜になると、さも自分たちの世界だといふやうに、さわぎだてます。家の前も、後も、横も、まるで夕立の降るやうに、蛙の聲でいっぱいです。静かだといふあなかなの夜も、このころは、兩戸

をしめてから、始めてはつとするほどです。  
もうまもなく、田植が始ります。

## 五 笛の名人

笛の名人用光は、ある年の夏、土佐の國から京都への  
ぼらうとして、船に乗った。

船が、ある港にとまつた夜のことであつた。どこから  
かあやしい船が現れて、用光の船に近づいたと思ふと、  
恐しい海賊が、どやどやと乗り移つて来て、用光をとり  
圍んでしまつた。

用光は、逃げようにも逃げられず、戦はうにも武器が  
なかつた。とても助らぬと覺悟をさめた。ただ、自分は  
樂人であるから、一生の思ひ出に、心残りなく笛を吹い  
てから死にたいと思つた。それで、海賊どもに向かつて、  
「かうなつては、おまへたちには、とてもかなはしない。

私も覺悟をした。私は樂人である。今ここで、命を取

もらひたい。さうして、こんなこともあつたと、世の  
中に傳へてもらひたい。」

といつて、笛を取り出した。海賊どもは、顔を見合はせ

て、

「おもしろい。まあ、ひとつ聞かうではないか。」

これが、名人といはれた自分の最後の曲だと思つて、  
用光は、靜かに吹き始めた。曲の進むにつれて、用光は  
自分の笛の音によつたやうに、ただ一心に吹いた。

雲もない空には、月が美しくかがやいてゐた。笛の音  
は、高く低く、波を越えてひびいた。海賊どもは、じつ  
と耳を傾けて聞いた。目には涙さへ浮かべてゐた。

やがて曲は終つた。

「だめだ。あの笛を聞いたら、わるいことなんかできな  
くなつた。」

海賊どもは、そのまゝ、船をこいで歸つて行つた。

皮おび、すべるよ。

するする、するする。

齒車、

齒車、

齒と齒とかみ合ひ、

ぎりぎり、ぎりぎり。

動くよ、

音だよ、

鐵だよ、ぐるぐる、

がたとん、どどとん。

## 七 國旗掲揚臺

國旗掲揚臺のそばに、男さんと、正男さんと、春枝さんの三

工場だ、  
機械だ。

鐵だよ、音だよ。

どどとん、どどとん。

ピストン、

腕だよ。

あつちへ、こつちへ

がたとん、がたとん。

車だ、

車輪だ。

ぐるぐる、まはるよ。

ぐるぐる、ぐるぐる。

車輪と

人が集つてゐる。三人とも、旗竿の先を見あげてゐる。

男 「すふふん、高いなあ。」

正男 「どのくらゐあると思ふ。」

男 「さあ、十四メートルぐらゐかな。」

正男 「ぼくは、十三メートル、ないと思ふ。」

男 「春枝さんは、どのくらゐ。」

春枝 「さうね。十メートルぐらゐかしら。」

そこへ花子さんが来る。

花子 「みんな、ここで何をしてゐるのですか。」

春枝 「あの國旗掲揚臺の高さを、あててゐるのです。」

花子さんも、旗竿の先を見あげる。

春枝 「花子さんは、どのくらゐと思ひますか。」

花子 「十一メートルはあると思ひます。」

春枝 「あら、みんながひますね。だが、いちばん

正しいでせう。」

正男 「何と加して、きちんと高さを計れないものか

國旗掲揚臺の前に、みんな集つてゐる。

男 「正男くん、わかつたつて、ほんたうにわかつた

のか。」

正男 「わかつた、ほんたうにわかつた。」

春枝 「どうすればいいのですか。」

正男 「まづ、ぼくのかげを計るのです。」

花子 「かげを。」

正男 「さう。」

男 「きみのかげを計るんぢやないよ。あの國旗掲揚臺の高さを計るんだよ。」

正男 「まあ、待ちたまへ。かういふわけなんだ。

正男さんは、巻尺を男さんに手渡しして、

これで、ぼくのかげの長さを計つてくれたまへ。」

男さんたちは、正男さんのかげを計る。

男 「百二十八センチあるよ。」

花子 「正男さんのかげを計つてから、どうしますの。」

二

それから、三日ばかりたつたある日、正男さんが、自分のか

げを見ながら考へこんでゐる。

正男 「けさは、ぼくのかげが、すつと長くのびてゐたのに、今見ると、こんなに短くなつてゐる。ぼくのせいの高さに變りはないのに、かげだけが、あんなにのびたりちぢんだりするのだな。」

正男さんは、あちこちと歩きながら考へる。しばらくして、

正男 「待てよ、かげがのびたりちぢんだりしてゐる間に、ぼくのせいの高さと同じ長さになる時が、あるにちがひない。いや、きつとあるはずだ。」  
歩くのをやめて、立ち止る。急に思ひついたらしく、手をうつて、

正男 「さうだ、さうだ。かうすればいいんだ。いい考へが浮かんた。」

ところが、ぼくのせいの高さは、百二十四センチなんです。あとしばらくで、かげが百二十四センチにちぢんで、ぼくのせいと同じ長さになります。」

男 「わかつた、やつとわかつた。」

春枝 「どうなるのですか。」

男 「正男くんのせいと、かげの長さと同じになつた時刻は、あの國旗掲揚臺の高さと、かげの長さが同じになるといふわけだらう。」

正男 「さう、さう。」

春枝 「それで、その時刻に、あの國旗掲揚臺のかげの長さを計るのですね。」

正男 「そのとおりです。」

男 「うまいところに氣がついたな。」

花子 「ほんたうですね。」

#### 四

正男 「さ、勇くん、ぼくが『ようし。』といつたら、國旗掲揚臺のかけの端に、しるしをつけてくれたまへ。」

勇さんは、國旗掲揚臺のかけのところへ行つて、しるしをつける用意をする。

春枝さんと、花子さんは、ぼくのかげが百二十四センチになつた時、知らせてください。」

二人は、巻尺を張つて見つめてゐる。まもなく、

花子 「今、百二十四センチになりました。」

正男さんは、「ようし。」と叫ぶ。勇さんはしるしをつける。

男 「さ、みんなで、いつしよに計つてみよう。」

みんな、「一メートル、二メートル、三メートル。」上聲を出して数へる。

みんな 「十メートル、十一メートル、十二メートル。」

男 「つづいて三十一メートル。」

だれもがさういふ。しかし、

夏ほど暑がなくて、

さかななものはあまい。

### 九 油蟬の一生

油蟬の子は、土の中に住んでゐます。前足が丈夫ですから、けらや、もぐらのやうに、土の中を上手にもぐつて行きます。たいていは、木の細い根をちくにして、まゐる穴をほり、その中はいつてゐます。油蟬の子の口には、針のやうな管がありますから、その管を木の根にさしこんで、汁を吸つて生きてゐます。

それにしても、この油蟬の子は、いつ、どこで生まれたのでせうか。

夏の末になると、親蟬は、木の皮にきずをつけて、その中に卵を生みます。卵は、そのままで冬を越して、あくる年の夏かへるのですが、その時は、二ミリぐらゐの

といつて、國旗掲揚臺の先を見あげる。

### 八 夏

じりじりと、

照りつける太陽。

ごみつばいでこぼこの道を、

トラックが通る。

「カーン、カーン、カーン。」

けたたましい響きだ、

鐵工場の前。

その庭に、日まはりが咲いてゐる。

くろぐろと、

茂つた夏草。木立には、

蟬が、

やがて木をおりて、いつのまにか、柔かい土の中にもぐりこんでしまひます。

最初は、浅いところにゐますが、年を取るにつれて、だんだん深いところへはいつて行きます。からだも大きくなり、形も色も、しだいに變つて、丈夫さうになります。

土の中へもぐつてから七年めに、やつと長い地下の生活が終るのです。そこで、油蟬の子は、深いところから、だんだん浅いところへ移つて、地上へ出る日の來るのを待つてゐます。

天氣のよい夏の夕方、油蟬の子は、今日こそと穴から地上へはひ出します。もう鳥などはたいいてい寝てゐますが、それでも油蟬の子は用心して、急いで安全な場所をさがします。木とか、草とかにのぼつて、安心だと思ふと、前足のつめで、しつかりとそれにしがみつきます。すると、ふしぎにも、前足は堅くその場所にくつついて、

動かなくなります。

そのうちに、堅いせなかの皮が縦に割れて、中からみづみづしいからだが見えます。すぐにせなかが出る。頭が出る。つづいて足が出て来ます。もう残ったところは、腹の下だけです。

そこで、おもしろい運動を始めます。ぐつとそりかへるやうにして、頭を後へさげます。しばらくは、そのままで、じつと動かないでゐますが、やがて起き直つたと思ふと、からだは完全に抜け出します。じわくちやになつてゐた羽が、みるみる延びて来ます。

もう、蟬の子ではありません。色はまだ青白くて、弱々しさうですが、形はりつばな親蟬です。

夜風に當り、朝日に當ると、すつかり色が變つて、見るからに丈夫さうな油蟬になります。さうして、天氣のよい夏の日を、楽しさうに飛びまはり、鳴きたてます。

油蟬は、それから二三週間生きてゐます。滿六年とい

はいやうな氣持がしました。

頭の上では、夏の太陽が、かんかん照つてゐます。青い波はきらきらと光つて、目が痛いやうです。

「おい、早くとびたまへ。きみがとばなければ、ぼくがとべないぢやないか。」

と、本田くんがいひました。

「よし。」

といつて、ちよつと下を見ると、足がびつたり板について、離れないやうな氣がします。

空では、大きな入道雲が笑つてゐます。

「弱虫、早くとびたまへ。」

と、山本くんがいつたので、今度は、下を見ないで、向かふの山をじつと見つめました。

「えいっ。」

といひながら、思ひきつて、兩足で臺をけりました。

「あつ。」

せう。ところで、この六年でさへ長いと思はれるのに、外國には、十何年も、土の中にもぐつてゐる蟬があると、いふことです。

## 十 とびこみ臺

「向かふのとびこみ臺へ、泳いで行かう。」

といつて、本田くんといつしよに、肩を並べて泳いで行きました。

とびこみ臺の中段へあがつて、そこから、二人とも、とびこみの練習をしました。が、本田くんの方が上手でした。

上のいちばん高い段からは、五年生の山本くんがとんでゐました。からだをびんとのばして、臺の上から、まさかさまに、水の中へすぷりとはいつて行くのは、いかにも愉快さうでした。

「わたなべくん、上の段からとばうよ。」

う水の中へもぐつてゐました。

水の上へ顔を出すと、本田くんと山本くんが、臺の上で笑つてゐました。

「おうい、ぼくのとび方はどうだつたい。」

と聞きますと、二人は、

「よかつた、よかつた。うまかつたよ。」

とはめてくれました。

ぼくは、とびこみ臺の方へ泳いで行きました。

# 十一 千早城

楠木正成がたてこもつた千早城は、けはしい金剛山にあるが、まことに小さな城で、軍勢もわづか千人ばかり。これを圍んだ賊は、百萬といふ大軍で、城の附近につたいは、すつかり人や馬でうづまつた。

こんな山城一つ、何ほどのことがあるものかと、賊が城の門まで攻めのぼると、城のやぐらから大きな石を投げ落して、賊のさわぐところを、さんさんに射た。賊は、坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。これにこりて、賊は、城の水をたやして、苦しめようとはかつた。

まづ、谷川のほとりに、三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに來られないやうにした。城中には、十分水の用意がしてあつた。二日たつても、三日たつても、汲みに

來ない。番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで來て、旗をうばつて引きあげた。

正成は、この旗を城門に立てて、さんさんに賊のわる口をいはせた。賊が、これを聞いて、くやしがつて攻め寄せると、正成は、高いがけの上から太木を落させた。さうして、これをよけようとして、賊のさわぐところを射させて、五千人餘りも殺した。

この上は、ひやうらう攻めにしようとして、賊は、攻め寄せないことにした。

ある朝まだ暗いうちに、城中から討つて出て、どつとときの聲をあげた。賊は、「それ、敵が出た。一人ものがすな。」と押し寄せた。城兵はさつと引きあげたが、二三十人だけはふみとどまつた。賊が、四方からこれをめがけて押し寄せると、城から大きな石を四五十、一度に落したので、また何百人か殺された。ふみとどまつてゐた

昭和二十一年三月二日 翻刻印刷  
昭和二十一年三月二十日 翻刻發行  
（昭和二十一年三月二日發行）

初等科國語三 第五十四回（昭和二十一年三月）  
◎ 定價 金五拾錢

著作權所有 發行所 文 部 省

Approved by Ministry  
of Education  
(Date Mar. 2, 1946.)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地  
翻刻發行 東京書籍株式會社  
印刷所 東京書籍株式會社  
代表者 井上源之丞

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式會社